

浅間山の火山活動解説資料（平成 27 年 7 月）

気象庁地震火山部
火山監視・情報センター

浅間山では、6月19日の噴火以降、噴火は観測されていません。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震は多い状態が続いています。また、二酸化硫黄の放出量も多い状態で経過しており、引き続き火山活動はやや高まった状態で経過しています。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性がありますので、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要です。登山者等は地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意してください。

平成27年6月11日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。その後、警報事項に変更はありません。

活動概況

- 火山ガスの状況（図3- 、図4- 、表1）

6日、10日及び21日に実施した現地調査では、二酸化硫黄の放出量は1日あたり1,100～2,200トンと引き続き多い状態で経過しています。

- 噴煙など表面現象の状況（図1～図2、図3- 、図4- 、表1）

火口からの噴煙は白色で、火口縁上概ね800m以下で経過しています。噴煙量は2015年6月以降、増加傾向がみられます。

山頂火口で、夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映¹⁾を引き続き観測しています。

- 地震や微動の発生状況（図3- ～ 、図4- ～ 、図5～図7、図9、表1）

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震及び火山性微動は、2014年頃から長期的に増加傾向がみられます。そのうち火山性地震は4月下旬頃からさらに増加しています。発生した地震の多くはBL型地震（低周波地震）ですが、7月に入ってから周期の短い火山性地震（BH型地震）の割合が増えています。震源の浅部への移動等の変化はみられていません。

火山性微動は7月以降、少ない状態で経過しています。

- 地殻変動の状況（図3- ～ 、図4- ～ 、図8、図10）

GNSS²⁾連続観測では、2009年秋頃から縮みの傾向がみられていましたが、一部の基線で2015年5月頃からわずかな伸びがみられます。

傾斜計³⁾による地殻変動観測では、2015年6月上旬頃から山頂西側のやや深いところを膨張源とする緩やかな変化がみられており、7月下旬頃からは鈍化しながらも継続しています。

光波測距観測⁴⁾による地殻変動観測では、6月頃から山頂と追分の間で縮みの傾向がみられており、山頂部のごく浅いところの膨張によるものである可能性があります。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成27年8月分）は平成27年9月8日発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政区・海岸線）』を使用しています（承認番号：平26情使、第578号）。

- 1) 赤熱した溶岩や高温のガス等が、噴煙や雲に移って明るく見える現象です。
- 2) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。
- 3) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等による変化を観測します。
- 4) レーザなどを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定する機器。山体の膨張や収縮による距離の変化を観測します。



図1 浅間山 火映の状況

左：長野県が黒斑山に設置している監視カメラ（7月25日00時39分）

右：鬼押遠望カメラ（7月25日23時44分）

- ・ 6月16日以降、夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映を観測しています（白丸内）。

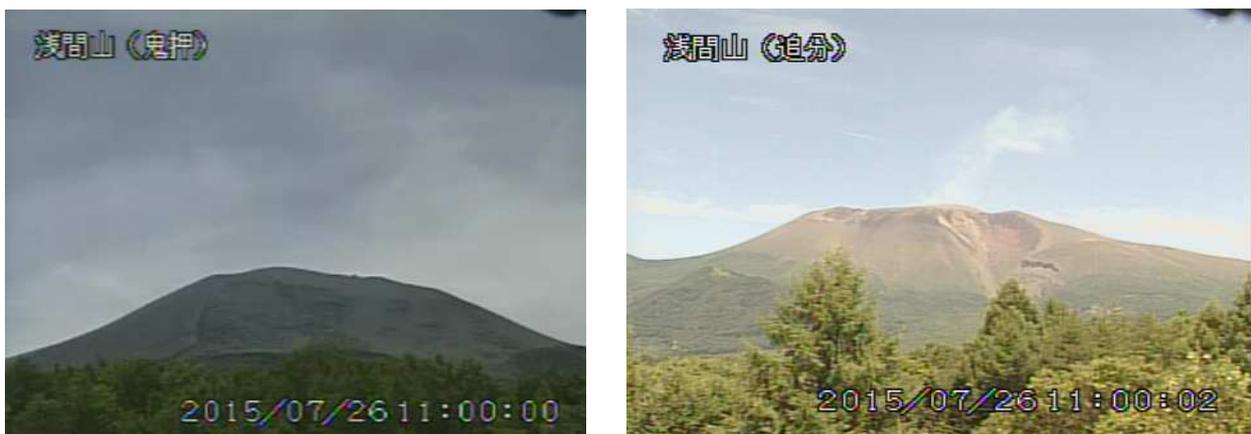


図2 浅間山 山頂部の噴煙の状況

(7月26日 左・鬼押、右・追分遠望カメラによる)

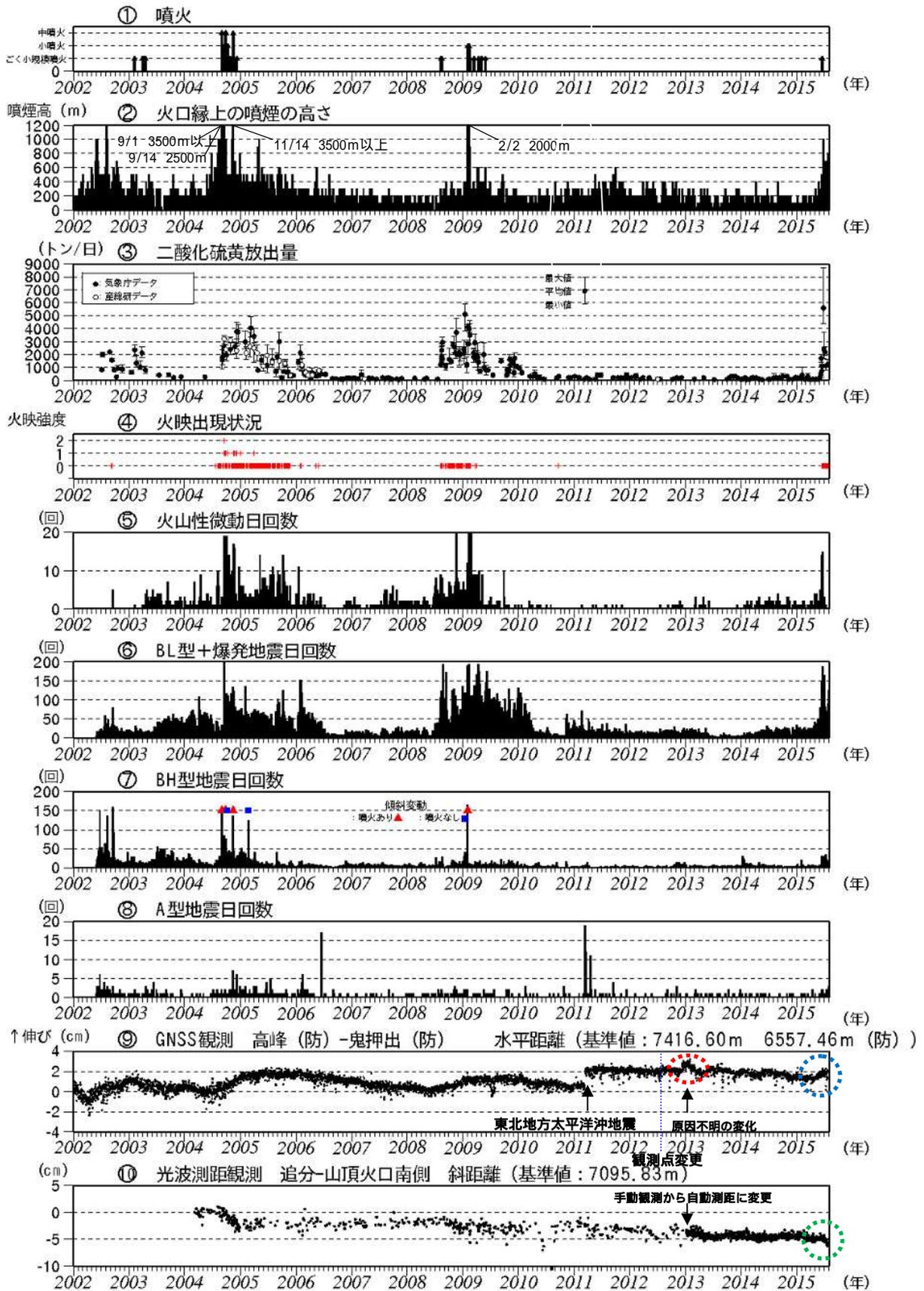


図3 浅間山 火山活動経過図(2002年1月1日~2015年7月31日)

図の説明は次ページに掲載しています。

図3及び図4の説明

国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。
7ページの脚注7)を参照。

- ~ 地震の種類別(図9参照)に計数を開始した2002年6月1日からのデータを掲載。
- 2002年1月1日~2012年7月31日 気象庁の高峰-鬼押出観測点間の基線長。
- 2012年8月1日以降 防災科学技術研究所の高峰-鬼押出観測点間の基線長。
- 2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。(防)は国立研究開発法人防災科学技術研究所の観測機器を示します。
- 赤丸で示す変化は、原因不明ですが、火山活動に起因するものでないと考えられます。
- 2015年5月頃からわずかな伸びがみられます(青丸で示す変化)。
- 2013年1月より、手動観測から自動測距による観測に変更しました。
- 2015年6月頃から山頂と追分の間で縮みの傾向がみられています(緑丸で示す変化)。
- 山頂部のごく浅いところの膨張によるものである可能性があります。

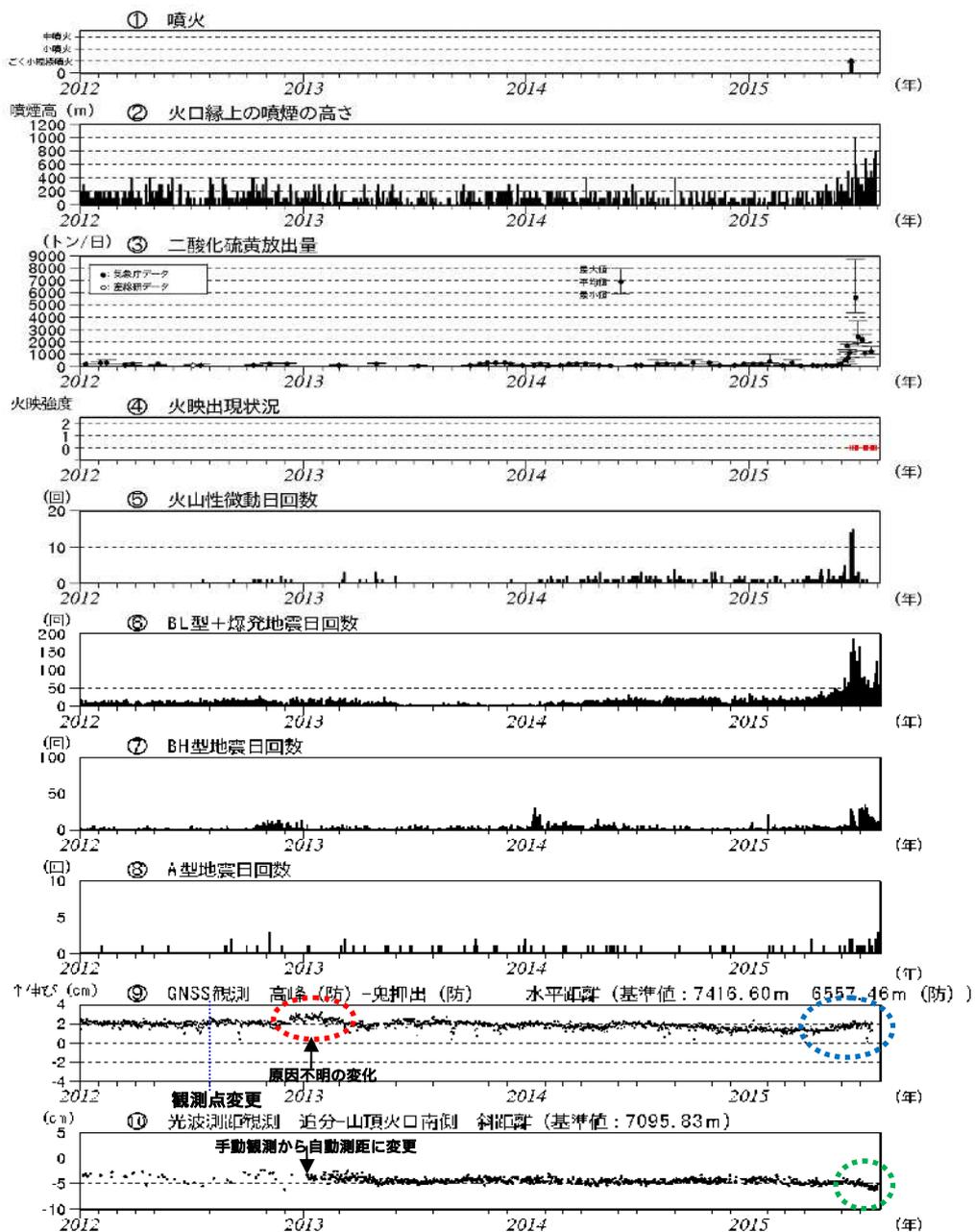


図4 浅間山 最近の火山活動経過図(2012年1月1日~2015年7月31日)

火山性地震は2015年4月下旬頃から増加しています。二酸化硫黄の放出量は2015年6月11日に1日あたり1,700トンと急増し、6月25日には5,600トンとさらに増加しました。7月以降も多い状態で経過しています。GNSS連続観測では2009年秋頃から縮みの傾向がみられていましたが、一部の基線で2015年5月頃からわずかな伸びがみられます。

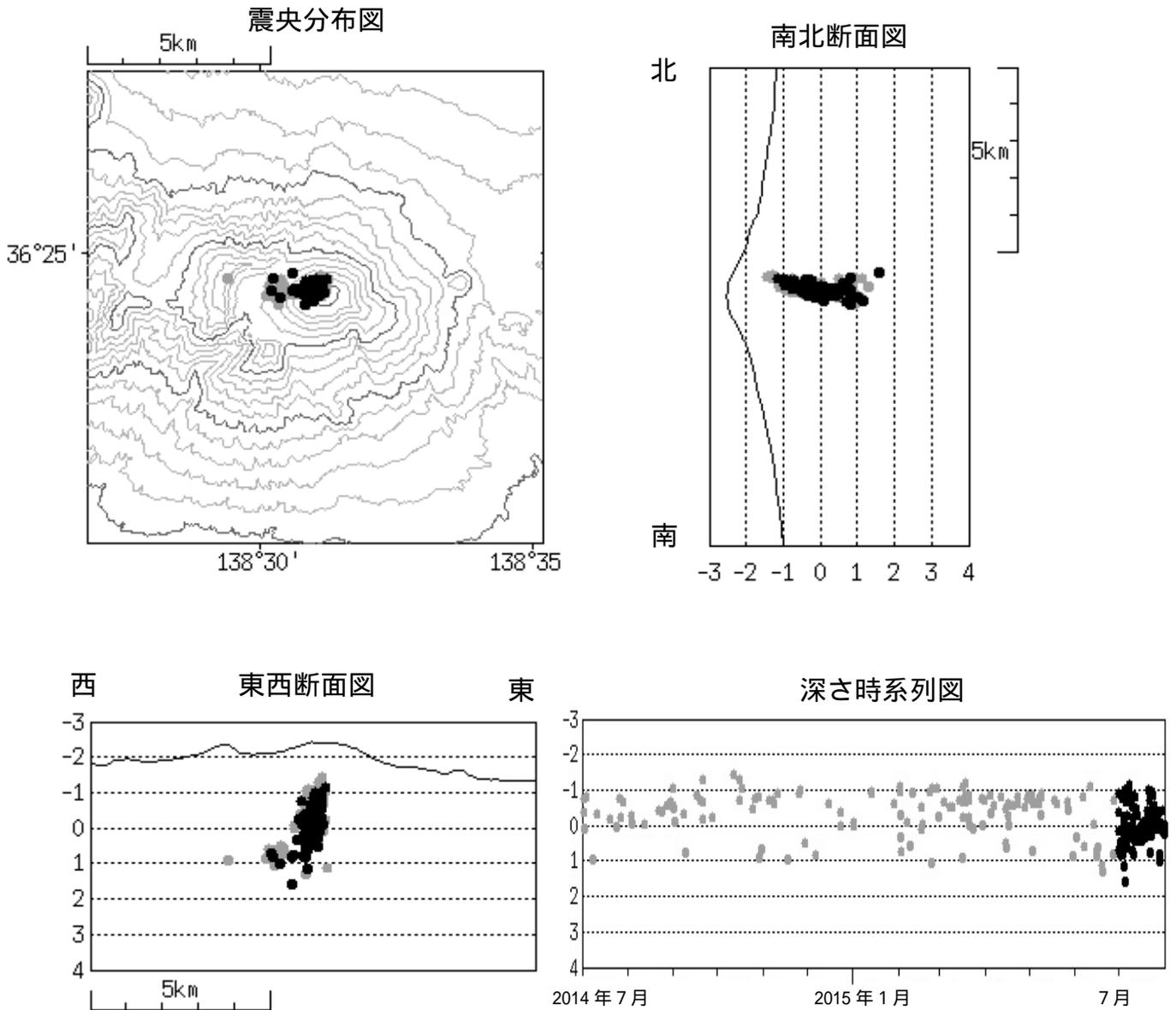


図5 浅間山 震源分布図(2014年7月1日~2015年7月31日)

: 2014年7月1日~2015年6月30日

: 2015年7月1日~7月31日

- ・火山性地震の震源は、山頂火口直下のごく浅い所で、これまでの震源の範囲内です。震源の浅部への移動等の変化はみられていません。

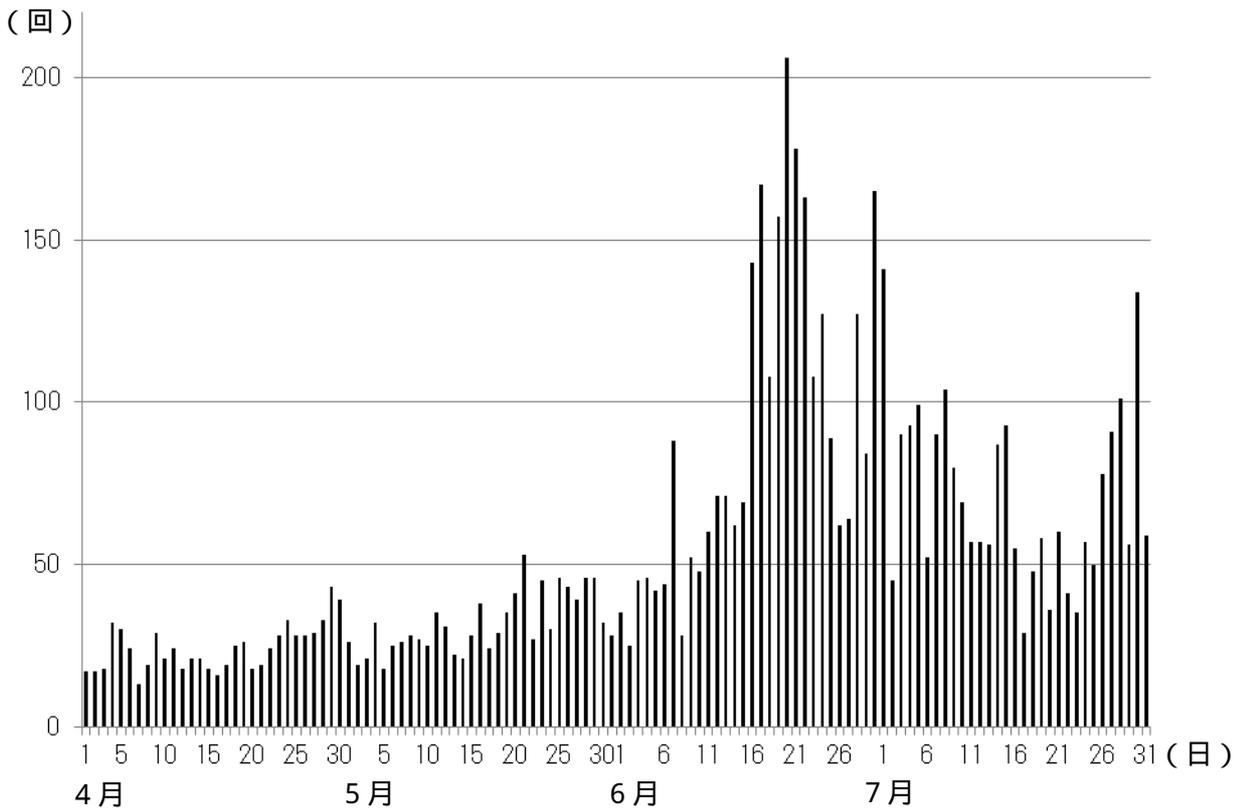


図6 浅間山 火山性地震の日別回数（2015年4月1日～7月31日）

・4月下旬頃から増加しています。7月の日回数の最多は1日の141回です。

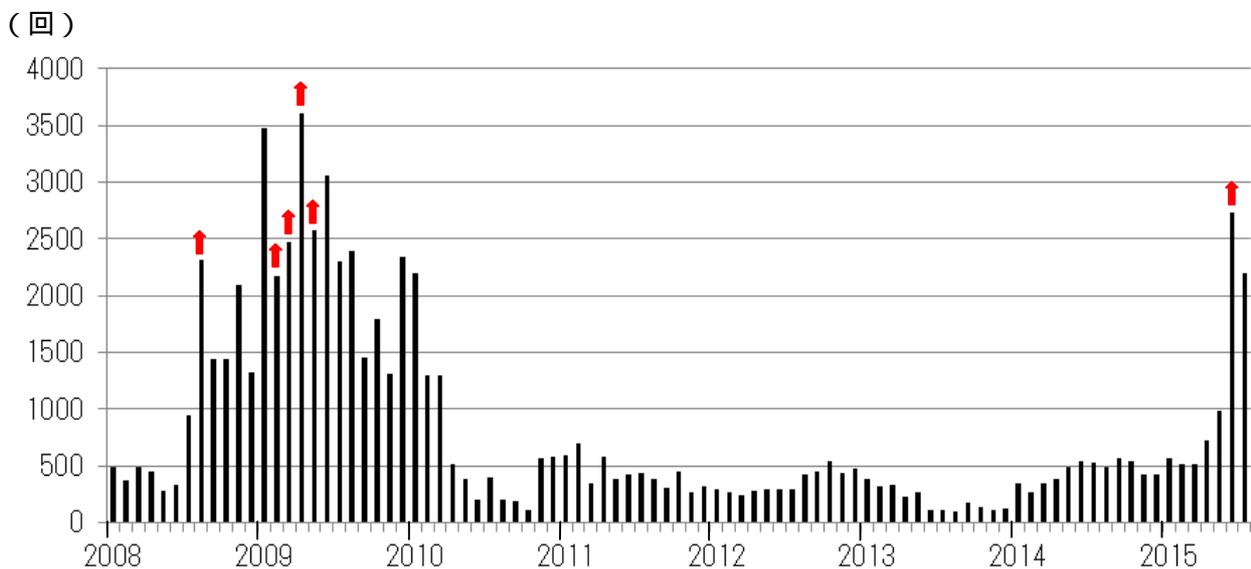


図7 浅間山 火山性地震の月別回数（2008年1月～2015年7月）

・7月の月回数は2,201回です。
 ・赤矢印は噴火のあった月を示しています。

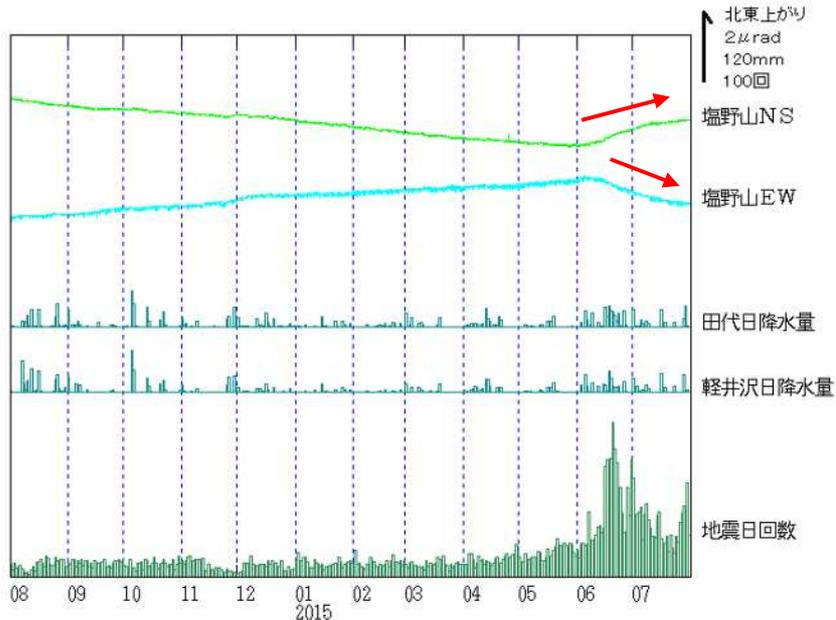


図8 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ(2014年8月1日~2015年7月31日)
 ・6月上旬頃から山頂西側のやや深いところを膨張源とする緩やかな変化がみられており、7月下旬からは鈍化しながらも継続しています。
 ＊赤矢印がこの火山活動に関連するとみられる変動を示しています。
 ＊データは時間平均値、潮汐補正済み

表1 浅間山 2015年7月の火山活動状況

7月	噴火回数	火山性地震の回数 ⁵⁾					地震合計	微動回数	噴煙の状況 ⁶⁾		火映強度 ⁷⁾	備考
		A型	BH型	BL型	E×型	その他			日最高(m)	噴煙量		
1日	0	1	29	111	0	0	141	0	×	×	×	
2日	0	0	10	35	0	0	45	0	300	2	×	
3日	0	1	26	62	0	1	90	0	×	×	-	
4日	0	1	30	62	0	0	93	0	×	×	-	
5日	0	0	15	80	0	4	99	1	300	2	-	
6日	0	1	17	32	0	2	52	0	×	×	-	二酸化硫黄放出量2,200トン/日
7日	0	0	17	73	0	0	90	0	200	2	-	
8日	0	0	22	82	0	0	104	0	×	×	0	
9日	0	1	28	51	0	0	80	1	×	×	0	
10日	0	0	35	34	0	0	69	0	400	2	0	二酸化硫黄放出量1,100トン/日
11日	0	0	30	27	0	0	57	0	700	2	0	
12日	0	0	27	30	0	0	57	0	500	2	0	
13日	0	0	30	26	0	0	56	0	200	2	0	
14日	0	0	27	60	0	0	87	1	200	1	0	
15日	0	0	21	72	0	0	93	0	400	2	0	
16日	0	0	10	45	0	0	55	0	×	×	×	
17日	0	0	12	17	0	0	29	0	×	×	×	
18日	0	2	17	29	0	0	48	0	×	×	×	
19日	0	0	11	47	0	0	58	0	400	2	-	
20日	0	0	14	22	0	0	36	0	200	2	-	
21日	0	0	15	45	0	0	60	0	500	2	0	二酸化硫黄放出量1,200トン/日
22日	0	1	17	23	0	0	41	0	100	1	0	
23日	0	0	16	19	0	0	35	0	×	×	0	
24日	0	0	13	42	0	2	57	0	400	2	0	
25日	0	0	7	43	0	0	50	0	400	2	0	
26日	0	0	10	67	0	1	78	0	700	2	-	
27日	0	1	8	82	0	0	91	0	800	3	0	
28日	0	2	10	89	0	0	101	0	×	×	×	
29日	0	0	8	48	0	0	56	0	×	×	0	
30日	0	0	9	125	0	0	134	0	×	×	-	
31日	0	3	11	44	0	1	59	0	×	×	-	
合計	0	14	552	1624	0	11	2201	3				

- 5) 火山性地震の計数基準は石尊観測点で最大振幅0.1μm以上、S - P時間3秒以内です。火山性地震の種類は図9のとおりです。
- 6) 噴煙の高さと噴煙量は定時観測(09時・15時)の日最大値です。噴煙量は以下の7階級で観測しています。
 1:極めて少量 2:少量 3:中量 4:やや多量 5:多量 6:極めて多量
 7:噴煙量6以上の大噴火。噴煙が山体を覆うくらい多く、噴煙の高さは成層圏まで達したとみられる
 -:噴煙なし ×:不明
- 7) 火映の強度は以下の4段階で観測しています。
 0:肉眼では確認できず、高感度カメラのみ確認できる程度 1:肉眼でようやく認められる程度
 2:肉眼で明らかに認められる程度 3:肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度
 -:火映なし ×:視程不良(夜間観測できなかった場合)

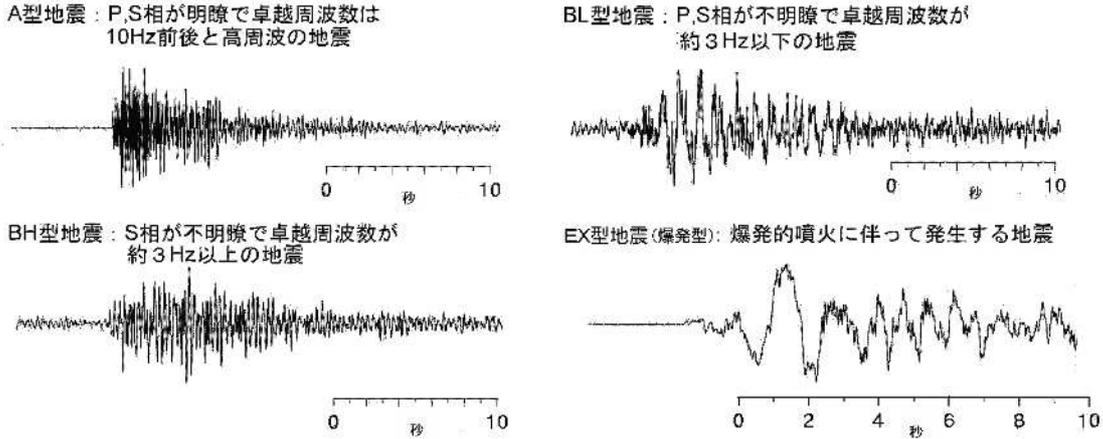


図9 浅間山で見られる火山性地震の特徴と波形例

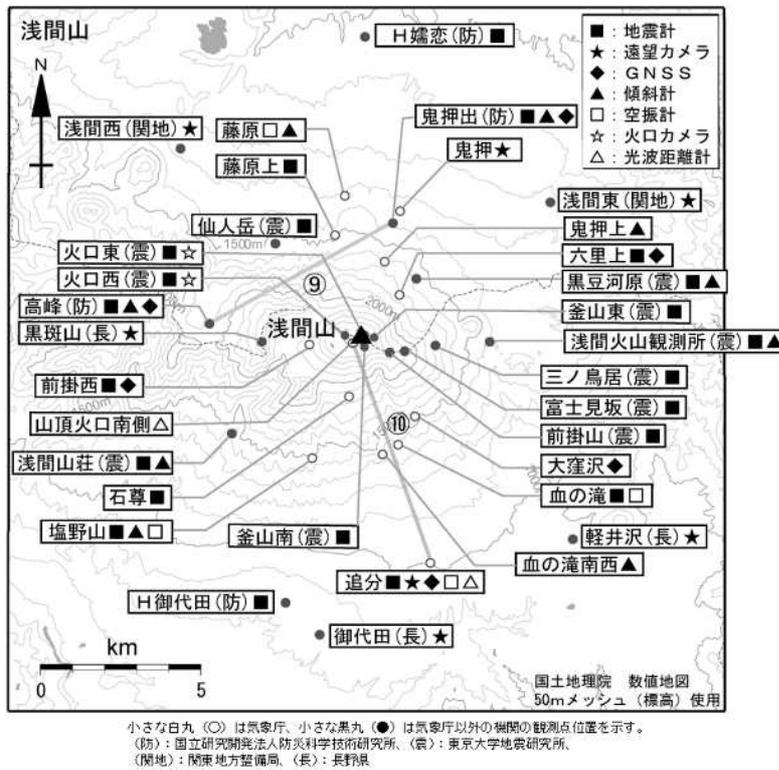


図10 浅間山 観測点配置図

GNSS基線及び光波測距測線は図3及び図4の、に対応しています。
この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図25000(行政界・海岸線)』および『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用しました。